

第8.1節 赤穂事件と忠臣蔵

（2020年12月 臨時増刊号）

江戸時代の中期に起きた赤穂藩藩主浅野内匠頭長矩（ながのり）の刃傷（にんじょう）事件に対して、幕府は「赤穂事件」として処理していました。江戸庶民はこの討入り行為を称賛する声が多く、「仮名手本忠臣蔵」（1748年初演）が人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として人気を博しました。主君を思う義士達による主君の仇討ちは、広く知られていますが、川崎市との「ゆかり」は意外と知られていないと思います。しかも内容が脚色され、実際とは異なる箇所もあります。「赤穂事件」として、真実やあまり知られていない話題をご紹介します。

8.1.1 事件の概要

事件は1701年4月21日（旧暦元禄14年3月14日）に播磨（はりま）（または播州（ばんしゅう）-現在の兵庫県）の赤穂藩第3代藩主の浅野内匠頭長矩（たくみのかみながのり）（53000石）が、江戸城内の「松之大廊下」（松の廊下とも表現—皇居東御苑の現地には「松之大廊下跡の石碑」がある）で、吉良上野介義央（きらこうづけのすけよしひさ（よしなか））に切りかかったことに端を発した事件でした。

事件発生後の午後1時50分頃、浅野内匠頭は芝愛宕（あたご）下（新橋4丁目付近—一日比谷通りに面して浅野内匠頭終焉の石碑あり）の奥州一関（岩手県）藩主田村建頭（かちあき）の屋敷にお預けと決まりました。午後3時50分頃には不浄門（罪人や城内での死者を出す）である平河門を出て、現在の新橋田村邸に移送されました。午後6時頃に田村邸の庭先で、武士としての死に装束の流儀や尊厳もなく、ましてや申し開きの時間も与えられない即刻の切腹の様です。享年35歳でした。（私は江戸城を出発するまでは、十分ではないが事情聴取はあったと思います）

更に藩主を務めた播州赤穂の浅野家は改易、赤穂城は幕府に明け渡す様に命じられました。事件発生から切腹までわずか7時間前後の短時間で、浅野内匠頭はこの世を去ろうとは思っていなかったと思います。浅野内匠頭は刃傷に及んだ訳を臣下に伝えたかったと思いますが、結局真実は不明のままです。

「松之大廊下」で刃傷に及んだ時、浅野は吉良に「この間の遺恨覚えているか？」と声をかけ、切りかかった様です。その場に居合わせた梶川与惣兵衛が刀の鏢を押し留め、駆け付けた方々に取り押さえられ、柳之間に運ばれる時に浅野内匠頭が繰り返した言葉は、「上野介此間中（このかんちゅう）、意趣これあり候故、殿中と申し、今日の事かたがた恐れ入り候へども、是非におよび申さず討ち果し候」との言葉だったそうです。現代風にすると、「上野介には、ここしばらくのあいだ、遺恨があったので、殿中であり、大事な儀式の日でありながらやむをえず討ち果たしました」と言っていたそうで、切りつけた時の言葉と合わせて、唯一本人が残した理由の発言でした。

一方、吉良上野介は、やはりその場に居合わせた高家衆に御医師之間に運ばれ、手当後、江戸城内の自分の部屋にいることを命じられたそうです。そして吉良が斬りつけられた時には吉良は抜刀をしてい

第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

ないので、この事件は「喧嘩」として幕府は扱わず、吉良にお咎めはありませんでした。「喧嘩両成敗」は成立しませんでした。

8.1.2 江戸城の様子

当時の江戸城の様子を絵や写真で紹介します。



(浅野内匠頭長矩)



(江戸城本丸 松之大廊下跡（皇居東御苑）解説板)



(江戸城本丸 松之大廊下跡（皇居東御苑）標石)



(歌川国貞（三代目歌川豊国）『忠雄義臣録第三』)



(松之大廊下:本丸表御殿の大広間から将軍との対面所である白書院に至る西へ19m、北へ31m、幅5m、畳敷きの廊下で、江戸東京博物館には、松之大廊下の模型が展示されています)

(古地図で見る松之大廊下—左記黄色の枠)

霞が関ビルと童門冬二の実践健康法は

第12章へ移行しました

第8.2節 赤穂事件の背景

(2020年02月 第37号)

事件への川崎市とのかかわりを話す前に、事件の背景や謎についてお話しします

1) 内匠頭辞世の句

多くの映画で浅野内匠頭の切腹が描かれるのは、辞世の句を詠みながら満開の桜の花が美しい場面ですが、辞世の句は「風さそふ花よりもなほ我はまた春の名残りをいかにとせむ」です。桜の花びらがはらはらと散る下で、白装束を着て切腹する場面が多いのですが、当時は旧暦（現在の4月20日頃）なので、桜は既に散っていたと思われる説があります。

事件から切腹まで短時間で辞世の句を残せる余裕がなく、後に上記の辞世の句が付け加えられたとの説がある様です。以前に述べた様に、死に装束の流儀も尊厳もない切腹で、一国の藩主大名の威厳がある切腹装束でなさそうなので、第5代将軍徳川綱吉がなぜ激怒して切腹を急がせたか、その裏には何か訳があったと思います。

浅野家筆頭家老の大石内蔵助にこの刃傷事件の事実を知らされたのは、早駕籠での4日半後で、赤穂にいた大石はじめ家臣たちは遺恨が残るのは、当然の事件であったと思います。

2) 浅野内匠頭と吉良上野介

江戸幕府は毎年正月、朝廷に年賀の挨拶をしています。朝廷もその返礼として使者を幕府に使わし、3月11日には江戸に着いて接待を受けていました。こうした朝廷とのやり取りを担当していたのが、高家であった吉良上野之介でした。元禄14年に高家肝煎（こうけきもいり）の立場だったので、朝廷の挨拶や朝廷の使者の接待を受け持っていました。

閑話休題 高家肝煎とは？（きもいり：世話をすること）

江戸幕府の典礼に関する職制は、開幕後段階的に整備されました。1603年（慶長8年）徳川家康の征夷大将軍の宣下の式典作法を大沢基宿（もといえ）（安土桃山～江戸前期の武将・旗本）に管掌させたのが、役職の「高家」の起源です。1615年徳川秀忠が足利一門である石橋家・吉良家・今川家の三家を高家として登用しました。主な職務は伊勢神宮・日光東照宮・久能山東照宮・寛永寺・鳳来山東照宮（愛知県）への将軍の代参、幕府からの朝廷への使者、京からの勅使・院使の接待や饗応役の大名への儀典指導役、高家の中で特に知識や礼儀作法に精通した3名を高家肝煎としました。1683年大沢基恒・畠山義里・吉良上野介（義央）たちが任命されました。

一方の浅野内匠頭は同じく元禄14年に、高家吉良上野介の接待補佐役に任命され、今回は2回目の補佐役でした。（第1回目は1683年（天和3年）で、八百屋お七事件があった年でした。前年には井原西鶴が好色一代男を発表）今回の接待役は、浅野内匠頭その他、伊予吉田藩（現在の愛媛県宇和島市）の3代目藩主伊達村豊も接待役でした。今回の朝廷接待は特に大事で、徳川綱吉の母である桂昌院に対して、朝廷から「従一位」という女性としては最高位となる官位を得る為、徳川綱吉が朝廷との儀式に

神経を使ったと思います。そのうえ刃傷事件が起きたのが奉答の儀式（朝廷の使者が將軍の願いを聞く式典）の当日で、儀式直前の最悪の状態でした。

浅野内匠頭も十分に当時の状況が分かっていた上での刃傷であり、よほどの理由があったと思います。しかし、松之大廊下の刃傷が、元禄14年3月14日に起きてしまいました。当時、殿中での刃傷沙汰は理由の如何を問わないで死罪と決まっていました。まして、朝廷の使者達との接客中であり、幕府の権威を朝廷に示すことでもあったので、幕府は即時に対応したと思います。徳川綱吉の生母桂昌院は、翌年元禄15年に女性最高位の「従一位」の官位と藤原光子（または宗子）の名前を賜っています。

事件後、浅野内匠頭が刃傷に及んだ理由を本人が説明していないので、本当の原因は今日でも不明ですが、想像を含めて諸説をご紹介します。

3) 刃傷を誘発した理由 ①遺恨説（梶川与惣兵衛の日記）との仮説

1701年（元禄14年）3月14日の松之大廊下での浅野内匠頭が吉良上野介に殿中松之大廊下で刃傷に及んだ現場に居合せた梶川頼照（通称、与惣兵衛（よそべい））が、この事件の詳細を「梶川与惣兵衛日記」に残しています。詳しくは次号で紹介しますが、要約すると次のようになります。

- ① 当日朝廷の勅使への奉答の儀式は、御台所（みだいどころ）信子（第5代將軍綱吉の正室）の担当であった
- ② 吉良上野介からの伝言で、勅使の都合で儀式の刻限が早まったと浅野内匠頭に告げられたが、直接確認が取れなかった
- ③ その時、勅使接待役の浅野内匠頭殿の姿が見えたので、梶川は「諸事宜しくお願いいたします」と挨拶、浅野内匠頭は「心得ております」と答えた

つまり、時間が早まったという事実が御台所や内匠頭に正確に伝わっていない可能性があります。

4) 刃傷を誘発した理由 ②江戸家老安井彦右衛門の失敗説との仮説

仮名手本忠臣蔵では、浅野内匠頭からの謝礼が少ないことに腹を立てた吉良上野介が、意地悪く嘘を教えたり足をひっぱったりした結果、恥をかかされた浅野内匠頭が腹を立て、殿中で刃傷に及んだことになっています。しかし、浅野内匠頭が接待役を仰せつかったのは、今回が初めてではありません。わずか17歳で大石内蔵助の叔父である江戸家老の補佐、そして吉良上野介に指導を仰ぎこの大役を大過なくこなしています。にもかかわらず2度目の時に、なぜ大きな失敗をするのでしょうか。

ここで浅野家の江戸家老が登場します。江戸家老安井彦右衛門は失敗を重ね、浅野内匠頭への言い訳として、吉良上野介に嘘を教えられたとの言い訳を繰り返したのではないのでしょうか。そして浅野内匠頭の切腹後の国許への報告書に、この主張をさらに膨らまして吉良上野介が嘘を教え、浅野家の評判を貶める噂を広げたことに憤怒した浅野内匠頭が殿中で刃傷沙汰に及んだと主張したのでないでしょうか。この江戸家老は討ち入りに参加しないで、江戸を出奔しているようです。

第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

閑話休題 播州赤穂浅野藩(五万三千石)には四人の家老がいました。筆頭城内家老・大石内蔵助(1500石)、国家老・藤井宗茂(又左衛門)(800石)、江戸家老・安井彦左衛門、財政担当の城内家老・大野九郎兵衛(おおのくろべえ)です。しかし、大石内蔵助を除く三人の家老は討ち入りには参加しませんでした。安井彦右衛門(やすい ひこえもん、生没年不詳)は、赤穂藩浅野氏の江戸家老で、650石(江戸扶持9人半)。長く江戸家老を任されていた様です。1701年(元禄14年)2月に藩主・浅野内匠頭が勅使饗応役を拜命した際に、上席家老藤井宗茂と共に補佐役を担っていました。同年3月14日に浅野内匠頭が刃傷に及んだ2日後の3月16日に、鉄砲洲上屋敷から退去した後、上屋敷近くの築地飯田町(現在の中央区築地7丁目東部あたり)に藤井宗茂、槽谷勘左衛門(用人・150石役料20石)、早川宗助(藩大目付・200石役料10石)達と生活をしていました。

5) .殿中での刃傷沙汰の真偽に関する仮説

歌舞伎や映画では、吉良上野介が浅野内匠頭を足蹴にして、「この田舎侍！」とのシーンが描かれています。この行為に我慢出来なくなった浅野内匠頭が抜刀し、吉良上野介に斬りつけています。しかし、これは本当でしょうか。

吉良家は直参旗本、高家筆頭、肝煎(きもいり)の大名格。さらに徳川家、上杉家、島津家との姻戚関係があります。しかし、どんな肩書きがあろうとも、4200石の旗本に過ぎません。一方、赤穂浅野家は、戦国大名浅野家の分家であり53,500石の大名で、格や所領の大きさからも浅野家の方がはるかに上です。

松の廊下ですれ違うときも道を譲るのは、吉良上野介であって浅野内匠頭ではありません。しかし、朝廷からの官位は浅野内匠頭が従五位下、吉良上野介は従四位下で、吉良上野介が格上でした。

なぜ刃傷沙汰は起きたのでしょうか。吉良上野介はもうすでにかかなりの高齢で、小言が多くなります。朝から朝廷の使者の饗応で失敗を繰り返す浅野内匠頭は、ストレスでかなり鬱積していたと思います。

いよいよ事件現場松の廊下です。こちらから松の廊下を吉良上野介と同僚が歩き、向こうから浅野内匠頭が歩いてきます。浅野内匠頭は江戸家老から嘘八百吹き込まれているので、吉良上野介への態度もかなり硬直したようです。まさか浅野内匠頭が嘘八百吹き込まれているとは思わない吉



第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

良上野介は、同僚に対して、「最近の若い侍は礼儀を知らないものが多いので困りますな」（どこかで聞いたことが有るセリフです）と、世間一般の話をしていたとすると、このセリフを聞きつけた浅野内匠頭は瞬間的にストレスが爆発して吉良上野介に切りかかったとも考えられます。浅野内匠頭は7歳で家督を継いだので、忍耐力がなかったのでしょう。

人生を豊かに（雑学のすすめ）

円覚寺の管長横田南嶺氏（筑波大学卒業）の言葉です。

亡くなった先代の足立老師がよく仰っていました。

「坊さんというのは、三つの言葉だけでいいのだ」ということです。檀家さんなり、誰かが寺に訪ねてきたら、まず相手の話をよく聞く。そうして途中で、「ああ、そう」「ああ、そう」と相槌を打ちながらとことん聞く。そして全部話終わった時に、うれしい話だったなら、「よかったね」と言う。悲しい、辛い話だったら、「困ったね」という。

この「ああ、そう」と「よかったね」と「困ったね」の三つの言葉だけでいい。これを三語族というと話してくださっていました。

決して、途中で口を挟んだり、ああしたらいい、こうすればよかったなどと言ってはいけないと説かれていました。なかなか簡単なようで難しいことでもあります。

耳寄り情報

【認知症にならない為に】

70代になると出来ないことが増えて、イライラして、うつ症状が現れる方が多くなります。肉類はその予防や改善が出来る食材です。うつ症状から認知症へと進むことが有るので、肉類は欠かせません。「筋肉を作る力」は年齢と共に低下し、20代を100%とすると、50代で57%、70代で48%になります。

食品100grに含まれるたんぱく質の含有量を比較しましょう。

鶏ささみ（生）23.0gr、	プロセスチーズ22.7gr、
しろさけ（生）22.3gr、	牛もも肉（脂身付き・生）19.5gr、
豚ロース（脂身付き・生）19.3gr、	さんま17.6gr、
鶏卵（全卵・生）12.3gr、	枝豆11.7gr、
ヨーグルト（脱脂加糖）4.3gr、	ブロッコリ（花序・生）4.3gr、
普通牛乳3.3gr	

となります。

近年はコレステロールが低すぎるのは良くない、適度に保っている人が長寿へと変わってきています。細胞の新陳代謝に欠かせないコレステロール値が低いほど、肺炎等感染症の死亡率が高くなる傾向になります。

第8.3節 忠臣蔵の疑問点

(2021年04月 第39号)

前号で紹介した梶川与惣兵衛の日記を詳しく説明し、事件に関する疑問点を考察します

8.3.1 梶川与惣兵衛の日記

1) 登城直後

梶川は当日いつもの様に登城して大奥に行ったそうです。その日の朝廷の勅使への奉答の儀式で、御台所（みだいどころ）信子（第5代將軍綱吉の正室）が対応の役目でした。しかし、吉良上野介からの伝言を受けて、勅使の都合で儀式の刻限が早まった事を告げられていたので、その詳細を直接吉良上野介殿に確認しようと思いました。吉良上野介殿を探したところ、松之廊下に面した下の部屋にいた茶坊主に、吉良上野介殿を「お呼びせよ」と命じたところ、「吉良上野介様は御老中に呼び出されました」との答えでした。

その時、勅使接待役の浅野内匠頭殿の姿が見えたので、茶坊主に「浅野内匠頭殿をお呼びせよ」と命じました。それを受けて浅野内匠頭殿が自分の方に参られたので、梶川は「諸事宜しくお願いいたします」と挨拶したそうです。浅野内匠頭は「心得ております」と答えたそうです。そして下（しも）の部屋の自分の席に戻られました。 **まだ内匠頭は平常心の様です。**

2) 突然の事件

その後、大広間から白書院を見てみたら、吉良公上野介殿が白書院の方からこちらへ来るのが見えたので、梶川は再び茶坊主に「吉良殿をお呼びせよ」と命じました。茶坊主は直ぐ吉良殿のもとに行きそのことを伝え、吉良殿は梶川の方へ向かって来られましたので梶川も吉良殿の方に近づき、松の廊下を曲がったところにある角柱から六間（約10.9m）から七間（約12.8m）位のところで、吉良と梶川が対面しました。梶川は、「本日の勅使様の刻限が早まったのでしょうか」と吉良殿に尋ねると、突然誰か分かりませんが、吉良殿の後ろから「この間の遺恨を覚えているか」と声をかけて、吉良殿に斬りかかった者がいました。大きな太刀の音が聞こえましたが、後に聞いたところでは傷はそれほど深くなく浅手でした。

3) 内蔵助の取り押さえ

自分たちも驚いて良く見れば、なんと勅使接待（御馳走）役の浅野内匠頭殿でした。上野介殿は後ろへ逃げようとしたのですが、また2回ほど斬られ、うつむきに倒れました。梶川たちは内匠頭に飛びかかりました。内匠頭殿との間合いは、二足か三足（一足は約25cm）の近距離で、すぐに組み付く形になったと記憶していると、梶川は記述に残しています。そして内匠頭殿の刀を取り上げ



歌川国貞（三代目歌川豊国）『忠雄義臣録第三』

るとともに、床に押し付けて動けなくして、近くにいた高家衆や接待役の伊達左京亮(さきょうのすけ)殿、茶坊主も来て、次々と取り押さえに加わりました。

後の話で、上野介は高家の品川豊前守殿と畠山下総守殿が、御医師の間に運んだそうです。一方、内匠頭殿は大広間の後ろに連れていかれ、「上野介には怨みがある。殿中であること、また今日は儀式があることに對して恐れ多いと思ったが、仕方なく刃傷に及んだ。討ち果たさせて欲しい」と、幾度も大声で繰り返して言っていました。しかし、高家衆はじめ、取り囲む人々から、「もはや事は終わったのです。おだまりなさい。あまり大声では如何なものかと思っ言いますよ」と言われ、以降内匠頭殿は、何も言わなくなりました。

4) 元禄世間咄風聞集について

元禄世間咄(話)風聞集を見てみましょう。この風聞集は1694年(元禄7年)～1703年(元禄16年)の間の江戸の噂話を書き留めた書で、浅野内匠頭の刃傷沙汰を始め、生類憐みの令に触れ処刑された事件、旗本の乱心等々の話を収めています。

刃傷事件に居合わせた茶坊主の話とされる文章によると内匠頭は「小用に立つ」と言って席を立ち、大廊下を通り「覚えたか」と言って、上野介に切りかかったとされています。これを信じれば、上野介から悪口を言われた直後に刃傷に及んだ訳ではなく、多少なりとも時間が経過した後に、刃傷に至っている様です。



8.3.2 事件に関する仮説を伴う疑問点

1) 乱心ではない？

十分な聴取ではなかったと思いますが、浅野内匠頭は「乱心ではない、その時なんとも堪忍出来ないことが有り、刃傷に及んだ」と答えているそうです。また、田村邸に預けられた時に、内匠頭は家臣に「このことはあらかじめ知らせておくべきだったが、今日やむを得ざる事情で知らせることが出来なかった。不審に思うだろう。」と伝える様に言っています。浅野内匠頭は相当以前から何かを思い詰めていたと想像できますが、真実はここでも不明です。当然吉良は全く身に覚えがないと言っています。

さて刃傷に至った理由の一つには、伝奏屋敷(古い風習や言い伝えを教えたり、江戸下向(げこう)したりする宿所)で、吉良が内匠頭に武士道が立たない様なひどい言葉を言われ、そのままにしておくと後々まで恥辱と思い、刃傷に至ったことが考えられます。

堀部弥兵衛は「悪口は殺害同様の御制禁」と書いております。吉良がその御制禁を犯したので内匠頭はそれに応じたまでのことでしょうか。

2) 内匠頭の持病が原因

浅野内匠頭は、自分には「つかえ」という持病があると、事件後に話している様です。この病は胸がつかえて息苦しくなり、朝廷の接待としてストレスが高まり、上野介が天敵に見え、厳しく受けた指導

を「いじめ」と受けたか判断が難しいのですが、当時の立場として、上下関係が厳しい封建社会の中で、持病と重なり堪忍袋が切れて頭が真っ白になり、刃傷に至った可能性もあります。

3) 塩の生産をめぐる対立

浅野内匠頭と吉良上野介の確執の原因は、赤穂（岡山県赤穂市）と吉良地方（愛知県西尾市吉良町―三河湾に面している）における塩の製法や販売路の問題で対立があった事が原因とする説があります。

史実においても、当時赤穂が塩田の技術で全国をリードしていたのは事実で、この技術は秘密にされていた訳ではなく、赤穂の製塩技術者は瀬戸内海各地に広がっていて、仙台藩が塩業技術者を依頼しに来た時も、赤穂藩はこれに応じ、赤穂の塩は大阪、吉良産の塩は三河等東海方面で売られていて、直接競合関係にはなかった様です。しかし1947年（昭和22年）に、田村栄太郎の書いた「裏返し忠臣蔵」では塩での対立を扱っています。真実はどこにあるのでしょうか。赤穂藩の塩田技術に上野介は嫉妬していたのではないのでしょうか。

4) 饗応予算が原因か

饗応予算を浅野内匠頭が「けちった」ことが刃傷の発端かも知れません。当時の饗応の費用は接待役となった藩が負担することになっていました。今回の饗応予算は、1,200両とされていたのですが、浅野内匠頭が高家肝煎（きもいり）の指南役の吉良上野介に無断で予算を削り、700両しか当てなかったことに対し、吉良上野介が浅野内匠頭を「叱責」、意地悪をし、そのことを恨んで刃傷に及んだとの話もある様です。

浅野内匠頭は今回2回目の接待役であることは以前にご紹介しましたが、前回（1683年）の時、400両を使ったとされていました。今回1701年の松の廊下の事件時は700両としましたが、実際、増額して赤穂藩も対応して、数字上は300両の増額となっていました。前回から18年経過して、米の物価は2倍となっていました。前回の倍の800両ではなく、700両では「減少」になります。藩の財政が苦しい事情も有ったと思いますが、この様な予算設定にしたことが、今でも不明の様です。

今回は將軍徳川綱吉の生母・桂昌院の官位を得るための特別な接待で有り、この当りの考えや、浅野内匠頭の予算取りの考え方が、筆者には分かりません。

8.3.3 事件の復習

1. 元禄14年3月。江戸城では時の將軍徳川綱吉の元へ天皇、上皇からの使者が遣わされ、年始の詔（みことのり）を伝える典礼が行われようとしていました。そのすべてを取り仕切っていたのが、吉良上野介です。そして、上野介の指示に従う勅使饗応役の浅野内匠頭でした。しかし、35歳の内匠頭は、何度言っても過ちを繰り返したそうです。
2. 不安を抱えたまま、3月12日に儀式はいよいよ始まりました。儀式の最終日の午前11時半頃、江戸城・松の廊下で事件は起きました。ご法度である殿中での抜刀、しかも重要な儀式の途中、前代

第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

未聞の行為でした。上野介は背中と額に傷を負い、額の傷口は14cm、骨まで達する深手を受けました。

3. 松の廊下事件から3週間後、吉良邸をこっそり窺う者達がありました。堀部安兵衛ら江戸詰めの赤穂浪士です。主君と碌を突然失った彼らは、納得できる理由を求めていました。喧嘩両成敗のはずが、片手落ちの裁定ではないか。
4. 少し先の経過をお教えします。吉良上野介にある通達が届き、江戸城下・呉服橋の現在の屋敷から、隅田川を超えた本所へ転居せよとの幕府の命令でした。お楽しみに。

【おまけ】

- ・ 饗応役には主に3万石から6万石で、主に6万石前後の外様大名が任命されました。
- ・ 浅野内匠頭は勅使饗応役を2回行っていますが、複数回任命されることがあります。筑前直方藩黒田長清は2回、津和野藩の亀井茲親（かめい これちか）は3回任命されています。
- ・ 年齢別にみると、20代が5回、30代が6回、40代が2回、50代が4回任命され、浅野内匠頭は35歳でした。

人生を豊かに（雑学のすすめ）

新型コロナウイルスの集団感染が発生したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の除菌作業をした「日本特殊清掃社」江連秀夫氏のアドバイスです。

- ① 噴霧はしない。アルコールでもウイルスが不活性化するには2～5分かかると言われています。空間に噴霧してもあまり効果はない。布巾に吹きかけ、拭き取ること。
- ② 拭く時は必ず一方向に。布巾でウイルスをはぎ取るイメージです。クルーズ船内では、「上から下、上から下へと一方向に」と説明したそうです。

耳寄り情報【赤穂の塩】

1971年（昭和46年）に日本国内で塩田が全面廃止となって以来、一部の限られた地域でつくられる少量の塩を除き、国内では「塩田産の塩」は生産されることがなくなりました。そのため、「塩田産の塩」は100%近くが輸入となりました。とはいえ、海外でつくられた塩をそのまま販売するのではなく、輸入した塩田産の原塩を、国内で加工するという方式がとられることが多い様です。

「赤穂の天塩」の場合は、生産の最終拠点は赤穂（赤穂化成）ですが、原塩はオーストラリアのシャークベイでとれる天日塩（てんぴえん）を輸入して使用しています。それを赤穂の伝統の技術を生かして国内生産しています。

シャークベイは、西オーストラリア州で初めて世界自然遺産に指定された美しい海洋です。清浄な海にしか存在しない古代生物ストロマトライトが群生し、多数のジュゴンやイルカが生息している地域として有名です。そこで太陽と風の力を活用して採取する天日塩は、素晴らしい質をもっています。

※差塩製法・・・濃い海水を煮詰めて塩を取り出す過程で、あえて“にがり”を含ませる（差す）製法。

第8.4節 古くから続く悪弊 賄賂

(2021年05月 第40号)

本号まで事件の原因を探ってきましたが、現代社会にも蔓延する賄賂について考えましょう

1) 謝礼の風習

指南役の吉良上野介に対して、「御馬代」（おうまだい）として納めていた「賄賂」は大判一枚（約120万円相当）です。そして、無事に接待を終えた後に、もう一枚贈るのが通例だったようです。浅野内匠頭も、前回の1回目に指南を受けた18年前は、前記の様にしていたようです。今回は2回目であったこともあり、大判一枚と巻絹1台、鯉節1連（2本）を贈っただけの様です。

今回同じく接待役であった伊予吉田藩・伊達村豊は、吉良に大判「100枚」を贈ったとされています。現在なら約1億2000万円です。この話が本当なら、吉良上野介が浅野内匠頭に対して、意地悪したことも納得します。また、伊達がこの様に高額を贈ったことも不思議です。

2) 「赤穂鐘秀記」（あこうしょうしゅうき）の記述

赤穂鐘秀記（元禄16年元（もと）加賀藩士杉本義鄰著）に、史実と俗説を取り交えて描かれた中で、吉良上野介は元来、必要程度を超えた暮らしをし、驕り、思い上がりがあり、利欲深く、いつも過言し、「付届」（つけとどけ）の少ない者にはいい加減に指導し、陰口をいう人物であったと記されています。

浅野が吉良に付届けをしなかったのも、吉良は不快に思い、浅野が勅使をどこで迎えるべきか吉良に聞くと、「そんなことは前もって知っておくべき」と嘲笑、更に「あの様な途方もないことをいう人間は接待役が務まるか」と声高に雑言したと書かれています。また、勅使が休憩する芝の増上寺宿坊の畳替えを吉良が指示しないで、浅野が危うく失態を招きそうになった話は、昔映画「忠臣蔵」で江戸の畳職人を集め、一夜で畳替えをした場面が思い出されました。

3) 室鳩巢（むろきゅうそう）の「赤穂義人録」

浅野内匠頭の親友の加藤遠江守から、「吉良から無礼なことをされても堪忍すべき」と忠告されていたとの話が載っているそうです。江戸時代中期に室鳩巢（武蔵国谷中村（現在の東京都台東区谷中）で生まれの儒学者）（1658年～1734年）の「赤穂義人録」（元禄16年10月著・宝永6年改訂）では、吉良が儀式作法を伝授する時、「賄賂」を受取っていたと書かれています。この本によれば、浅野は公私をわきまえず、贈り物をする気は全く無かったことが、吉良との不和の根本原因になったと言っています。

松の廊下の刃傷の時に居合わせた梶川与惣兵衛が「勅答の礼が終わったら連絡が欲しい」と浅野に伝え、吉良は横から口をはさみ、「相談は私にすべき、そうでないと不都合が生じる」と浅野を侮辱し、更に「田舎者は礼を知らない。またお役目を辱めるだろう」と追い打ちをかけた。それが浅野の刃傷に及んだと言っています。先程の梶川与惣兵衛の描いた「梶川与惣兵衛日記」との記述矛盾があり、梶川記述は吉良側に有利で、他の多く出されている本は反吉良の内容です。江戸の住民も本の内容を知って、吉良が行っていたいじめに関して、当時から公然と認知されていたことが伺えます。

第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

4) 徳川実記の記述

更に、江戸幕府の公式史書である「徳川実紀」の1701年（元禄14年）3月14日の文章には、吉良は高家として力を持っていて、指導を受ける大名たちも吉良の顔色を伺い、機嫌を取り、吉良に従い指導をしてもらったのです。賄賂の貪りや吉良のいじめに関して、当時から公然と認知されていたことが読み取れるようです。

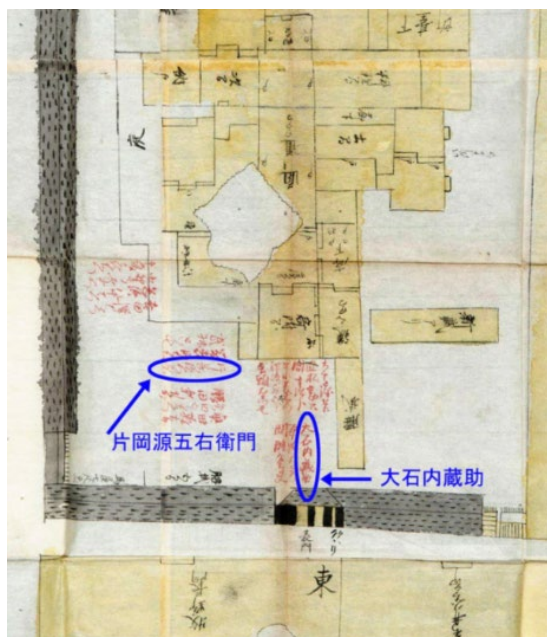
閑話休題 「徳川実記」とは、『御実紀』（ごじっき）、通称『徳川実紀』（とくがわじっき）は、19世紀前半に編纂された江戸幕府の公式史書です。全517巻です。編集の中心人物は林述斎と成島司直で、起稿から35年近い事業の末、天保14年12月（1844年1月から2月）に正本が完成しました。

徳川家康から10代将軍徳川家治（天明期、1786年）までの事象を日ごとに記述しています。それぞれの記録は、歴代将軍在任時の出来事を日付順にまとめた本編と、その将軍にまつわる逸話を集めた附録からなっています。徳川実紀の記事は、幕府の日記を基礎として記述されていますが、明暦の大火による各種史料の焼失など、開府から実紀の編纂が開始されるまでの長年の間に散逸が見られます。日記の欠落した期間は、別の史料を寄せ集めて記載した旨が、編者の註として記されていますが、記事の利用にあたっては、文中に記された出典の史料名に留意すべきです。



閑話休題 （討ち入りは午前4時、引上げは午前6時が有力）

約80名いた吉良家家臣のうち、死者16名、負傷者23名で、赤穂浪士側は死者0名、負傷者2名と圧勝でした。吉良上野介は炭小屋に隠れ、浪士に発見されて庭に引き出される場面を想像しそうですが、実は台所に潜んでいました。台所内の物置に隠れていましたが槍で刺されて絶命。集まってきた浪士たち20名に代わる代わる太刀を受け、その死体には20数か所の傷があったそうです。上野介は門番に本人と確認されました。



討ち入りの時の浪士の配置が記された「吉良上野介屋敷」の写本（宮内庁が公開）

スリランカからの恩恵は第12章に移行しました

墨田区観光協会の資料は省略しました